

南方（その他）

北満から

南海の孤島クサイ島へ

愛媛県 高橋 茂清

私は昭和十六年徴集の甲種合格で昭和十七年一月十日現役兵として徳島の西部第三十三部隊に入隊、三か月の教育ののち、関東軍第四独立守備歩兵第二十大隊要員として四月二十八日坂出港出帆、五月四日満州国牡丹江市に到着、第三中隊に所属することになりました。

一期の検閲後、下士候をすすめられ、第一次教育を牡丹江で終え、続いて旅順の下士候隊に行くよう隊付

きの准尉から言われたので、「自分は農家の長男です
ので早く家へ帰らなければなりませんから」と言って
准尉も半ば了承された様子でしたが、これを聞いた中
隊長柴田善大尉に呼びつけられ「この非常時に貴様何
を言うか」と怒鳴りつけられ、なおも断つたら怒り出
し軍刀の柄に手をかけたのでテッキリ斬られると観念
しました。

このように意に反して、旅順の歩兵第一下士官候補
者教育隊に入ったのが昭和十八年二月一日でした。

その頃の戦況はガダルカナルで敗れて撤退する時期
でした。厳しい訓練の続くうち同期生でムーリンの重
砲隊から来ていた者が、南方行きのため原隊復帰を命
ぜられ、教育半ばで帰っていったのを皮切りに、次か
ら次へと帰る例が出始めたのでいつかは自分にもくる

たと覚悟していた。

十一月八日、たまたま旅順水師營の古戦場で露営演習していた時、区隊長から「高橋、四独の者全員集めろ」と言われ「原隊復帰の命令が出た、直ちに準備にかかれ迎えのトラックが来ているぞ」、とうとう来たかと勇んで旅順駅から牡丹江に帰りました。

間もなく南洋第二支隊編成が下令され四独あげて編成替えになったのです。支隊長に中支の連隊長だった原田義和少将が着任され、中隊長も柴田善大尉が精神異常で旅順の精神病院に入院間もなく死亡されたので、同姓の柴田榮夫中尉に交代しました。

准尉から「高橋お前は優秀だから残すつもりだったが機関銃中隊の分隊長要員としてお前を名指しできているので行ってくれ」と言われ、第二機関銃中隊の分隊長になったのです。御存知のように独歩は現役兵ばかりのバリバリでしたが、三年兵は秋田、私等二年兵は四国、初年兵は山形出身だったのでズーゾー弁にはさまれて苦労しました。南方派遣がきまってから年輩の召集兵も入ってきました。

伍長に任官した私は旅順で教育中に教官から「兵隊を叩くのは下手な教育である。陛下の赤子である兵隊を叩いてはいかぬ」と教え込まれていたしたので兵隊を叩いたことはありませんでした。今までは対ソ戦一本槍の訓練から突然の島嶼作戦への切り替えて戸惑いました。

酷寒零下三十度の牡丹江からの出発ですから、いかに熱帯に行くからといっても防寒服なしではすみません。駅まで行進するのに軍靴に滑り止めの縄を巻く始末です。

慌ただしい出征準備も整って釜山を出航したのが十二月六日でした。「日蘭丸」「遼陽丸」の二隻に南洋支隊が乗り、もう一隻には三独で編成した海上機動第一旅団が乗船したようです。釜山の埠頭で旅順下士候隊での同期生に偶然会ったのでお互いの武運を祈りましたが彼は海上機動の船に乗ると言っていました。

もうその頃の南方ではマキン、タラワが玉碎する程の危ない状況でしたので船は東に西に蛇行し対空、対潜警戒は日夜嚴重を極め、私等機関銃隊は甲板上に高

射体制で対空監視に当たりました。三隻の輸送船は駆潜艇に護られながら一路南方へ向かいましたが制空、制海権を完全に失った海路を無事乗り切れるか非常に不安でした。

釜山から豊後水道を抜け南進するにつれ気温は日毎に上昇し、冬期であっても防寒衣から防暑衣袴に着換え、対米戦に備えて「対米戦争の菜」を渡され船上で教育が始められた。アメリカ兵は車に乗ってばかりいるので脚が弱いから脚を狙えと書いてあった。

船の食事は充分あったが船酔いで寝込む者が続出し食べ残しが多かった。我が船団は幸運にも空襲も潜水艦にも出会うことなく無事トラック島に着いた。所要日数二十日間は普通の倍の航程である。それだけ蛇行ジグザクの航海だった。当初は日の丸の飛行機を見たが以後日の丸機を見ることは無かった。

トラック島に来て我々の行く先がクサイ島であることが判った。南洋委任統治領の東南端にある弧島である。玉砕したマキン、タラワはクサイの東方にある。

船団は十二月二十八日トラック島を離れた。クサイ島

へは二隻が向かう。海上機動の船は別の島へと向かった（昭和十九年二月二十四日ブルーエン島で玉砕）。

昭和十九年の元旦は赤道直下の暑い甲板に整列して宮城遥拝をして一死報国を誓いました。

一月三日ようやくクサイ島に着きました。島の周囲は約二十キロ位、中央部は山がそびえ全島ジャングルに包まれた小さな島です。

この島は日本領ですから南洋興発会社の人達もいたのでしょうが戦局悪化のため引揚げたのでしょう、見ることはありませんでした。

私達の前に海軍の小部隊と施設隊の半島人がいたようです。それに金沢編成の百七連隊（粕部隊）の第一大隊が十八年十二月に上陸していました。また、海軍の六十八防空隊がクサイ島の近くで潜水艦にやられ高射砲など兵器弾薬食糧一切が海没、三分の一の人員のみが救助され、裸で上陸したのが正月元旦で、私達上陸の三日前のことでした。ですから各部隊合わせて約四千六百人が居たようです。

満州から携行した半年分の食糧で約二年間喰い伸ば

すのですから、それは大変でした。上陸して五か月位たった頃、ロ号潜水艦が甲板に糧秣をゴム袋に詰めたのを積んで夜間補給してくれましたが空襲が激しく一回だけで終わりましたから終戦まで補給は全くありませんでした。

原田支隊長が立派な人で先ず軍隊と現地人と居住区を隔離し、椰子の実、バナナ、甘藷畑等は完全に區別し、軍隊用は嚴重な自給体制の下給品として平等に分配することにしたものですから島民とのトラブルも無く、戦地にあり勝ちな戦犯問題も全くありませんでした。

そのため戦後五十年近くたっても島民との友好関係が保たれ「友好の碑」が建てられ、亡くなった軍人だけでなく島民も祀られているので、戦友会の有志が訪問したりして親交が続いています。

この島には遺骨収集の必要はないのです。それは遺体は埋葬せず火葬にして遺骨は本人のものを充分詰めて全部帰国の時に持ち帰りましたので、よく話に出ます紙一枚、石ころ一つ、骨片一個しか入っていません。

たなどはクサイ島に限り全くありませんでした。

ただ一つ私が今でも心残りなのは同じ機関銃中隊の同年兵が復員船が沖合に來ているというのに逃亡してしまい、皆で二三日探しても判らず遂にそのままになったことです。戦病死扱いになったようですが、その者の骨は帰っていませんのです。中隊長も最後まで気にしていました。栄養失調からきた精神異常になってしまったのだと思います。

島民は迷信で鰻を食べませんので湿地にはたくさいますでしたが、湿地にいる細菌が傷口から入ると目の玉や爪が青くなつて一週間で死ぬ奇病（ウイルス氏病とか）に注意するよう衛生兵に言われました。また小魚やエビも獲れましたがだんだん少なくなりました。

食い物の管理がきびしい方には悲劇も生まれました。椰子の実を盗んだ軍曹が処分を恐れて拳銃自殺したり、甘藷畑をあさつた兵隊が自殺したり、海に入つて死ぬ者（精神異常）などが多発しました。私の教えた兵隊で山形出身の優秀な兵隊が糧秣庫の衛兵に立って乾パンを盗んだのが見付かり、処分決定前に小銃の

引き金に足の指をかけ銃口を口にくわえて引き金を引き自殺したことがあります。母一人子一人の家庭でした可哀想でなりません。食事は握りこぶし大の甘藷が二つに太平洋汁と呼んだ海水に芋づるや葉の浮かんた塩汁が一食分でしたから私も十一貫匁にやせました。

島民の常食が甘藷でしたので苗をわけてもらい土にさして三か月もすれば食べられる程に成長が早いのですが待ち切れず、若いうちに掘り起こす者もいて管理が大変でした。口に入る物はなんでも口にするものですから下痢を起こしついに栄養失調で倒れる者が相次ぎました。

敵の空襲は毎日欠かさずあり最初のうちは高空からの爆撃でしたが、こちらに対空火器が無いことが判つてからは低空で椰子林スレスレに飛んで来て機銃掃射をやるものですから、ある時重機を高射用に据えて対空射撃を命じましたら翼にパッと小さく白煙が立っただけで悠々と飛び去ったと思つたら、急に旋回してきて陣地に猛烈な爆撃と機銃掃射で仕返しを受けてビツ

クリしました。それからは支隊命令で対空射撃は禁止され、空襲警報が出ると近くの防空壕に退避するだけでした。

昭和十九年六月頃、丁度私が衛兵司令で支隊長の近くにいた時でしたが、夕方沖合に米機動部隊が現われ駆逐艦が接近してきたことがありました。甲板を白い水兵服の米兵が歩いているのがハッキリ見えました。曳光弾を五、六十発山の中に射ち込まれ、昼のように明るくなりました。いよいよ玉砕か、と覚悟しました。

衛兵勤務という一等勤務で死ねば本望だと思いましたが。幸いこちらから応戦がなかったので敵は相手に不足と思ったのかそのまま姿を消しましたが、後日談によれば、あの時の機動部隊はサイパン攻略に向かう途中だったそうで、危うく虎口を脱したとはこういう時のことをいうのでしょうか。

敵上陸に備えて戦車壕掘り、陣地構築、交通壕造りが空腹を抱えて強行されました。資材も補給がないので島の海岸にビッシリ生えているマングローブの根っ

こを切って使いましたが、これが樫の木のように堅くて難儀しました。屋根材として並べた上に土をかぶせて俺体としました。また燃料にも適したので炊事は勿論ですが遺体の火葬用としても使いました。

ムクミ性の栄養失調死の遺体は水分が多くて中々焼けないので棒で腹を突いて水を出して漸く焼いた事を思い出しますが、本当に申し訳ないことをしたものだと思います。

沖繩戦の様子は無電で入ったようですが断片的に知らされただけで士気にひびく悪い情報は伏せられたようです。

ソ連の満州侵攻の情報はショックでした。なにしろ一年半前までは住んでいた所ですからね。ある若い見習士官は「関東軍虎の子の現役バリバリの我等が居れば叩きのめしてやるものを。機関銃枕に戦死できるものを。こんな離れ小島に連れてきて優秀な兵隊をムザムザと餓死させるとは大本営もなにを考えているのか。作戦指導が間違っている」と檄を飛ばしていました。

この島にはマラリア蚊がいなかったのでマラリアに

は誰もなりませんでしたが、代わりにテング熱とウィルス氏病が流行しました。テング熱はハンカのようなもので、三十七、八度の発熱で四〜五日が勝負です。漁労班の者がたまたま七本足のタコを獲ってきたら、もともとタコは八本足のものだ。一本はお前が食べたのだろうと責められて閉口しておりました。

広島に新型爆弾が落とされたと聞かされて間もなく、終戦を告げられたのは八月十六日でした。戦争から取り残された孤島にやっと安らぎの空気が漂いました。

四千六百人のうち亡くなった人は三百八十人と聞きました。そのほとんどは戦うことなく餓死に近い状態だったのですから無念だったと思います。

九月始め米駆逐艦上で支隊長が降伏調印を行い、海岸に兵器弾薬を集積し武装解除を受け、種々な作業につきながら帰る日を待ちました。十一月五日に病院船「氷川丸」が病人を乗せて出航するのを見送るうちに、十一月十八日待望の第二次復員船「高栄丸」が到着、乗船検査に備えてメモ類は焼却しましたが、軍隊手帳だけは持ち帰ろうと思ひ靴下の中に隠して検査をパス

して乗船したので、現在でも戦友間で「高橋の軍隊手帳」としていろいろな証明用として利用されています。

帰りの航程は二年前と較べれば半分の日数十二日間で浦賀に上陸、十二月二日懐かしのわが家に帰りました。

南方軍補充要員

プケット島で強制労働

高知県 植田 太郎

私は昭和十九年九月二十五日、現役兵として徴兵され、一生涯忘れることの出来ない戦争体験をしたのである。

四国各市町村から郷土の人たちの信頼と歓呼に送られ栄えある現役兵として、勇名その名を知られし第十一師団歩兵第十二連隊留守隊に入隊した。大東亜戦争も漸く決戦の様相を呈し、国家の総力を結集して戦い抜かんとする時なのである。

集まれる者は選り抜かれたる偉丈夫であり、尽忠報国の念厚き青年達であった。

私は本日を期して大日本帝国軍人となり得たる喜びと感激に打ち振るえたのである。先輩勇士の跡を継ぐ我々に弱兵はなく皆一騎当千の強者であった。

普通寺練兵場や大麻山演習場にて訓練を重ね、徳島県箬蔵方面機動演習の後、待望久しい出動命令が下った。

十月二十三日夜、粛々として普通寺を出発し、門司港付近で集結のあと、いよいよ輸送船「有馬丸」一万二千トンに混成兵千二百名が乗船し、祖国日本を出港した。

怒濤逆巻く大海原を進路を南に向け、台湾を過ぎると飛行機による爆弾攻撃、潜水艦による攻撃を受けた。しかし無事洋々たる西太平洋を突破し、船中での苦勞を重ねたが、十一月九日無事にシンガポール港に上陸。プキテマ高地にて訓練を受けたあと、十一月二十五日マレー半島マラッカ海峡に面するポトデクソンに移駐、同地において淀兵団と合流し、徹底的な猛訓練を受け